## あとがき

今回の展覧会はヤン・フォス(JAN VOSS)の新作展である.一昨年4月に当画廊では初めてフォスの展覧会を開催したが,今回はその後の仕事をおみせする第2回目,2年半振りの展覧会である.フォスの最近の活躍振りについてはカタログの展覧会資料をご覧いただきたい.この10月,パリでは恒例のフィアック(画商見本市)が開催されるが,パリのアドリアン・マーグ画廊ではヤン・フォスを展示することになっている.その会場を訪れる方は,アドリアン・マーグ画廊のスタンドで,フォスが11月に,東京の佐谷画廊で展覧会を開催することを示すポスターをご覧になることであろう.ポスターと同時に,今回の展覧会を記念し版画(カラー木版,120ed,29.5×42.5cm,1985)を作成した.カタログの表紙(オフセット印刷)はこの木版の作品を使用している.

この展覧会カタログのテキストは寺田透さんにお願いし,「ヤン・フォス頌」と題するエッセイをいただいた.大変嬉しく思っている.カタログのテキストをお願いした時,寺田さんはこのところ,こういう種類の仕事はしていないので,と最初は躊躇されたが,しばらくあって,書きましょうと快諾された.その辺の事情は「ヤン・フォス頌」の前文のとおりである.久し振りに寺田さんの美術についてのエッセーが読めるのはうれしいことである.

毎年ヨーロッパを訪れるとき,私は必ずパリのヤン・フォスのアトリエを訪問している.今年は1月と9月に彼のアトリエを訪問したが,とりわけ昨年の6月の小旅行は忘れることができない.フォス夫妻,私と女房の4人は彼の運転する自動車でパリからバーゼルまで5時間余りのドライブをしたのである.ヨーロッパでこれだけ長時間のドライブをしたのは私には初めてで,フランスの平野を疾走する爽快感を満喫した.と同時に,フランスは農業国だな,と身をもって感じたものである.

さてフォスの作品であるが,最近,彼はコラージュの仕事に熱中している.これまでの線描の仕事から,次第に線が消え面の仕事へと移ってきており,さらにその面がコラージュになってきている.画面は一層ダイナミックにそして力強くなってきている.寺田さんも指摘されているように,フォスの絵をみているとイノサンスという言葉がフッと出てくるのである.彼の絵が明るく透明感のあるのは彼のイノサンス的資質のせいであろう.イノサンス——これは私にとっては遙かな昔,遠くに置き忘れてしまったものであるが,フォスはこの私の失ったものを蘇らせてくれる.

フォス夫妻はこの展覧会のために一週間の日程で来日し,11月1日のオープニング・パーティに出席の予定である.極めて短時間の滞在であるが,よき旅であることを心から祈っている.

1985年10月6日

佐谷画廊　佐谷和彦

[追記]

VOSSの画集が次のとおり刊行された.テキストはベルナール・ノエル氏が執筆し,清水徹,長谷泰両氏共訳の日本語訳の小冊子が付いている.併せてこの画集もご覧いただきたい.

"Trajet de Jan Voss"
Bernard Noël
André Dimanche Editeur
1985 juillet
P.181, 32×25cm